

否定形における能動態・受動態の選択について

The Choice of Active or Passive Voice in the Negative Form

劉志毅

Abstract

This paper examines the conditions for the possibility of choosing between active and passive in negative forms, and for semantic (in)variance between the two, as well as how “negation” influences the choice between active and passive. We have focused on the “sinai form” and “sinakatta form” and found the following. Active-passive choice and semantic (in)variance is contingent upon the ease with which the subject's property is obtained from the verb negated with *sinai*. On the other hand, when the verb is negated with *sinakatta*, the aspectual property of the verb plays the key role. More concretely, active-passive choice and semantic (in)variance depend on how readily one can get the meaning of “unfinished events” (i.e., avoidance of contact and avoidance of change) from the verb negated by *sinakatta*. In addition, regarding the conditions under which negation influences active-passive choice, it was found that negation tends to do so when the verb is negated with *sinai* and the subject's property is hard to obtain from the negated verb form. It was also found that the choice is affected when the verb is negated by *sinakatta* and belongs to class A (reversible change/durational verbs) or class B (verbs expressing contact between the agent and object).

Keywords

能動態、受動態、述定、「シナイ形」、「シナカタ形」

active voice, passive voice, nexus, *sinai* form, *sinakatta* form

1. はじめに

能動態・受動態⁽¹⁾の選択については、工藤(1990)、光信(1998)、林(2005, 2009)、劉(2022, 2023a, 2023b)等で議論されてきたように、これまでは動詞が肯定形である場合に着目する研究がほとんどであった⁽²⁾。しかし、動詞が否定形の場合は、能動・受動の選択が肯定の場合と異なっているという現象が見られる。

- (1) a. 太郎が次郎を騙す。 b. 次郎が太郎に騙される。
 c. 太郎が次郎を騙さない。 d. 次郎が太郎に騙されない。

(1) 便宜上、以下は能動・受動と略称する。

(2) 工藤(1990)、光信(1998)、林(2005, 2009)では、能動・受動について「対立」という用語が使用されている。工藤(1990)では、能動・受動が共に存在しうる場合を「対立が成立する」としているが、光信(1998)では、能動も受動も使用できる場合を「対立がなくなる」としている。また、林(2005, 2009)では、能動・受動が同様の意味を表す場合を「対立が成り立つ」としている。このように、同じ用語でも全く逆の意味を表すことがあるため、本稿では、劉(2023a, 2023b)に従い、「対立」という用語を使用せず、能動・受動が共に自然である場合に、表現主体(話し手／書き手)が能動・受動のどちらを選択するのかという観点から、「選択」という用語を使用する。また、劉(2023b:47f)を参考に、能動・受動が共に自然である場合のことを「両方選択可能」、能動・受動の片方しか自然でない場合のことを「片方選択可能」と呼ぶ。能動だけが自然である場合のことを「能動優位」、受動だけが自然である場合のことを「受動優位」とする。一方、能動・受動の否定形の意味が同じものである場合を「意味的一致」、異なる場合を「意味的不一致」と呼ぶ。さらに、能動・受動が共に不自然である場合を「非文法的」とする。

- (2) a. 太郎が次郎を逃がす。 b. 次郎が太郎に逃がされる。
c. 太郎が次郎を逃がさない。 d. ??次郎が太郎に逃がされない。

上の(1ab)(2ab)のように、肯定形の場合は、能動・受動が共に自然であるため、両者は両方選択可能であるが、(1cd)(2cd)のように、否定形になると、能動・受動は両方選択可能であったり、片方選択可能であったりする現象が見られるのである⁽³⁾。

また、(3)のように、動詞が「シナカタ形」である場合は、能動・受動は両方選択可能となるが、林(2005, 2009)では、両者が意味的に一致する場合もあれば一致しない場合もあると指摘されている。

- (3) a. 太郎は花子を騙さなかった。〈未生起〉⁽⁴⁾
b. #花子は太郎に騙されなかった。((3b)、林2005:109)〈未生起・未成立〉

林(2005:108f, 2009:101f)によると、(3a)のように、能動は「太郎が花子を騙そうと考えているが、結局実行しなかった」という意味しか表さない。これは「未生起」と呼ばれており、「動作や変化が最初から全く生起しなかった」ことを意味する。それに対し、(3b)の受動は「未生起」だけでなく、「太郎が色々な手口を使って花子を騙そうしたが、結局失敗した」という意味も表しうる。これは「未成立」と呼ばれており、「動作や変化が実際に生起したが、事象の達成に到達しなかったため、途中で終わってしまい、結果的に完遂されなかった」と定義されている⁽⁵⁾。事象が「未生起」である場合は、能動・受動は対立しているが、事象が「未成立」である場合は、能動が「未生起」しか表さないため、能動・受動は対立していないという。

また、林(2005:110f, 2009:103)によれば、(4)の動詞「殴る」のように、「終了限界」が語彙的意味に内在せず、「開始限界」しかない場合は、「未生起」の意味しか含意しないという。しかし、(5a)のように、能動は「未成立」を表さないが、(5b)の受動「殴られなかった」の場合は、「太郎が次郎を殴ろうとして何発もパンチを繰り出したが、うまく次郎に避けられた」というような場合を想定すれば、「殴られなかった」も「未成立」の意味として解釈できると思われる。

- (4) 僕は山田くんに殴られなかった。(林2005:110)〈未生起〉
(5) a. 太郎は次郎を殴らなかった。〈未生起〉

(3) 以下、特に出典を明示していない用例は作例である。なお、本稿では、例文の自然さに揺れがあると思われる用例に絞って、母語話者に確認したりアンケート調査したりした。アンケート調査については、詳しくは第3節の注8で取り上げる。

(4) 本稿では、〈 〉で動詞の否定形の意味を示す。また、動詞の否定形の意味の違いによって、能動・受動が意味的に不一致である場合は、受動態の例文の冒頭に「#」を付ける。

(5) なお、林(2005:108, 2009:101)では、「成立」という用語も挙げられており、「実際に生起した動作または変化が事象の達成点に至り、完結した」と定義されている。

b. #次郎は太郎に殴られなかった。〈未生起・未成立〉

以上のように、動詞が否定である場合、どのような条件において、能動・受動の選択状況が決まるのか、また、能動・受動が両方選択可能である場合の、能動・受動の意味的一致性の問題や、「否定」が一つの影響要素としてどのような条件において能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいのかについては、検討すべき課題が残されている。

そこで本稿では、述定の「シナイ形」と「シナカタ形」に絞って、否定形による能動・受動の選択の可能性と意味的一致性についての条件を考察する。また、肯定の場合と比較することを通して、「否定」が単一の影響要素⁽⁶⁾として、能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を明らかにする。さらに、「シナイ形」と「シナカタ形」の間の、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の異同及びその原因を解明することを目的とする。

以下、第2節では、先行研究をまとめ問題の所在を提示する。続いて、第3節では、本稿の研究対象と研究方法を述べる。また、第4節では、動詞が「シナイ形」の場合と「シナカタ形」の場合に分けて考察を行う。さらに、第5節では、動詞が「シナイ形」の場合と「シナカタ形」の場合の異同とその原因を分析する。最後に、第6節では、全体をまとめ、今後の課題を示す。

2. 先行研究

この節では、能動・受動の選択と否定に関する先行研究を取り上げ、問題の所在を提示する。第1節で触れたように、林(2005:118f, 2009:112f)によると、事象達成の観点から、事象が「未生起」である場合は、能動・受動は対立しているが、事象が「未成立」である場合は、能動・受動は対立していないという。また、林(2005:109-112, 2009:102-105)では、事象の不成立を表す受動文の「未生起」「未成立」の意味は動詞の語彙的意味に内在する「開始限界」「終了限界」のあり方によって決まってくると指摘されている。例えば、(6)～(9)のような限界動詞の場合、事象の不成立を表す受動文は「未生起」「未成立」の両方を表しているのに対し、(10)のような非限界動詞の場合は、受動文は「未生起」だけを表している。

(6) 罐詰だけは消えてるが、庫は破られなかったんだ。

(三浦哲郎『忍ぶ川』、林2005:109)⁽⁷⁾

(7) 花子は太郎に騙されなかった。

(林2005:109)((3b)再掲)

(8) 二〇四航空隊の六機の護衛戦闘機は、実際には一機もおとされなかった。

(阿川弘之『山本五十六』、林2005:109)

(6) 劉(2022:64)によれば、能動・受動の選択に影響を及ぼす要素については、「動詞の他動性」や「名詞句階層」などといった様々な要素が先行研究からまとめられる。また、劉(2023a)では「テンス」、劉(2023b)では「アスペクト」もそれぞれ単一の影響要素として、能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件として検討されている。詳しくは第3節で述べる。

(7) 下線は原文のままである。以下同様。

- (9) 昨日は皆で足首に風船をつけて割りあうというゲームをやったが、彼女の風船だけは最後まで割られなかった。

(林2005:109)

- (10) 僕は山田くんに殴られなかった。

(林2005:110)((4)再掲)

ただし、(11)(12)の「与える」「気づく」は限界動詞ではあるが、瞬間動詞に類似するものであり、動詞の「開始限界」と「終了限界」がほぼ重なっているため、「未成立」は表さず「未生起」だけを表すと指摘されている。

- (11) 近藤は松永の話を聞いてがっかりした様子であったが、「とにかく言うだけのことは言う」と言った。だが、「言う」機会すらすぐには与えられなかった。

(阿川弘之『山本五十六』、林2005:111)

- (12) しかし、市民たちには気づかれなかったが、長崎市内にもひそかな動きはみえていた。

(吉村 昭『戦艦武蔵』、林2005:111)

以上のように、林(2005, 2009)の指摘は非常に示唆的ではあるが、それだけでは説明できない例も存在する。既述のように、(13b)では、「殴る」は非限界動詞であるため、受動の「殴られなかった」は「未生起」の意味だけを持つとされているが、「太郎が次郎を殴ろうとして何発もパンチを繰り出したが、うまく次郎に避けられた」というような場合を想定すれば、「殴られなかった」も「未成立」の意味として解釈できると考えられる。

- (13) a. 太郎は次郎を殴らなかった。〈未生起〉

b. #次郎は太郎に殴られなかった。〈未生起・未成立〉((5)再掲)

また、(14)の「育てる」は、動詞が「シナカタ形」であり、かつ動詞の開始限界と終了限界は重なっていないが、受動態の方も「未生起」しか表さず、能動・受動は「意味的一致」となる。以上のことから、動詞が「シナカタ形」である場合の、能動・受動の意味的一致性については、まだ検討する余地があるように思われる。さらに、動詞が「シナイ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性や意味的一致性、「否定」が単一の影響要素として、どのような条件で能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいのかについても、不明のままである。

- (14) a. 太郎は花子を育てなかった。〈未生起〉

b. 花子は太郎に育てられなかった。〈未生起〉

そこで本稿では、以下の三つの課題を設け、動詞が「シナイ形」「シナカタ形」である場

合の、能動・受動の選択の可能性、意味的一致性の条件を明らかにし、否定の形による異同の原因を説明することを目的とする。

- ①動詞が「シナイ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性と意味的一致性の条件、及び、「否定」がこの場合において能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を説明すること
- ②動詞が「シナカッタ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性と意味的一致性の条件、及び、「否定」がこの場合において能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を説明すること
- ③「シナイ形」と「シナカッタ形」の間の条件の異同及びその原因を説明すること

3. 研究対象と研究方法

この節では、研究対象と研究方法を述べる。研究対象と研究方法については、同じ能動・受動の選択を扱う劉(2022, 2023a, 2023b)と林(2005, 2009)を参考にする。

まず、受動態の類型については、村木(1991:5f)では、受動文に対立する文の違いに基づいて、受動文を直接受動文と間接受動文に分けている。(15)のように、直接受動文と能動文とは変形関係によって対立しているのに対し、(16)のように、間接受動文は基本文との派生関係によって対立しているという。

(15) a. 太郎は次郎をなぐった。 b. 次郎は太郎になぐられた。(村木1991:7)

(16) a. 雨が降ッた。 b. 花子は雨に降られた。(村木1991:18)

林(2005:105, 2009:97)でも指摘されているように、また上の用例からも分かるように、村木(1991:18)によれば、直接受動文((15b))は能動文((15a))と同じ事象を表すのに対し、間接受動文((16b))は基本文((16a))に被動者(花子)が追加され、つまり二つの事象を表していることになる。本稿では、上の(1cd)(2cd)のように、能動・受動が同じ事象を表すにもかかわらず、能動・受動が両方選択可能になったり片方選択可能になったりする現象(能動・受動の形式選択)、また、林(2005:105ff, 2009:97ff)で指摘された上の(3)のように、能動・受動が同じ事象を表すように見えて、実際は、動詞が「シナカッタ形」の場合、両者の否定形の意味が異なる場合もあるという現象(能動・受動の意味的一致性)、の二点を考察の対象としている。そのため、(16)のような間接受動文はそもそも能動と受動の項が対応しておらず、両者の表す事態も異なっていると判断し、それを対象外として、村木(1991)の直接受動文のみを研究対象とする。

また、動詞の否定の形に関しては、(17)(18)のように、動詞が「シテイナイ形」「シテイナカッタ形」である場合でも、能動・受動の否定の意味が基本的に「シナカッタ形」の場合と同様であるため、本稿では、動詞の「シナイ形」と「シナカッタ形」に限定して考察を行う。

- (17) a. 太郎は次郎を殴っていない。〈未生起〉
b. #次郎は太郎に殴られていない。〈未生起・未成立〉
c. 太郎は次郎を殴っていなかった。〈未生起〉
d. #次郎は太郎に殴られていなかった。〈未生起・未成立〉
(18) a. 太郎は次郎を殴らなかった。〈未生起〉
b. #次郎は太郎に殴られなかった。〈未生起・未成立〉(5)再掲

次に、研究方法については、以下、考察に使用する動詞、他の要素の影響を排除する方法の二つに分けて説明を行う。本稿で使用する動詞については、劉(2022, 2023a, 2023b)を参考に、小泉ほか(1989)の『日本語基本動詞用法辞典』にある受身用法のある動詞から、使用する動詞を抽出する。また、工藤(1990)で指摘された、能動・受動の選択に関係する「動詞の他動性」と角田(1991)での「名詞句階層」を考慮し、動詞の動作主と対象／相手／所有者が共に有情物を取る動詞を抽出する。その結果、(19)のようになる。

- (19) A類 預ける、奪う、隠す、囲む、殺す、縛る、絞める、育てる、倒す、騙す、逃がす、盗む、雇う、渡す(14語)
B類 愛する、謝る、追う、感謝する、嫌う、蹴る、誤解する、断る、刺す、誘う、叱る、救う、攻める、責める、助ける、尋ねる、叩く、頼む、注意する、殴る、憎む、踏む、褒める、招く、見せる、認める、求める(27語)

林(2005, 2009)で指摘されたように、能動・受動の意味的一致性が動詞の開始限界と終了限界に関わっているため、本稿では、劉(2023b)を参考に、抽出した動詞をA類(主体動作・客体変化動詞)とB類(主体動作動詞)に分けた。劉(2023b:50f)では、畠山(2008)と影山(1996)を参考に動詞を分類しているが、具体的には、以下の通りである。動詞の性質を明らかにするために、「てある」構文に入る動詞、あるいは「ひとVする」構文に入らない動詞は対象に状態変化があるとするテスト(影山1996:65, 82f)、及び「Vしたのはいつ?」に「発話時にVしている(結果継続)」の意味がある場合には動詞が限界動詞になるとするテスト(畠山2008:33)を組み合わせることを提案した畠山(2008)に従って分類を行っている。

なお、工藤(1990:62)では「騙す」が「対象に対する積極的心的態度を表すもの」、すなわち、対象に変化をさせるものではない動詞とされているが、「ひと騙しする」が不自然なように、対象に変化が生じなければ「騙す」にならないことから、本稿ではそれをA類に位置づける。また、劉(2023b:47)でも言及されているように、工藤(1995:83f)によると、「埋めるー埋まる」のような有対自他動詞の場合、他動詞が主体動作・客体変化動詞、自動詞が主体変化動詞となる。また、金水(2000b:29)でも同様の趣旨が述べられている。従って、「育てる」の場合も、「ひと育てする」が不自然であり、また「育てる」が「育つ」と有対自他動詞の関係にある他動詞であるため、主体動作・客体変化動詞と判断した。

さらに、「否定」という単一の要素の影響を考察する際には、他の要素の影響を避ける必要がある。劉(2022:64)では、能動・受動の選択に影響する要素として、本稿で扱う述定の場合に関しては、「動詞の他動性」「名詞句階層」「名詞の不特定性」「文脈」が挙げられている。それらに加えて、劉(2023a)の「テンス」、劉(2023b)の「アスペクト」も考慮に入れる必要がある。本稿では、劉(2022等)を参照し、以下のような方法を取る。①動詞の他動性が弱い動詞を研究対象外とする。②動詞の動作主と対象／相手／所有者の階層・特定性を揃える。③単文だけを対象とする。④動詞のテンス・アスペクト形式ごとに考察を行う。また、「テンス」の影響を避けるために、劉(2023a:180)で指摘された「テンス」による影響を考慮しない。つまり、「現場性」を持たず、かつ動詞がスル／シタ形である場合は、モダリティが真性ではないため、スル形の能動・受動が文法的ではありながらやや不自然になる、という点を考慮しないことにするという意味である。というのも、用例自体は文法的であっても、用例の自然さをめぐる判定には、母語話者によって判断の揺れが出るとも思われるからである。

なお、上の③は「文脈」の影響を避けるためである。奥津(1983:78)では、「〈視点〉固定の原則」が指摘されている。それは「一度立てた主語は、必要のない限り、途中で変えない」というものである。また、古賀(2013:12, 18)によれば、「できるだけ長く同じ誰か(何か)を話題の中心に据えておきたいという「テキストの結束性」に対する要求が受動文の使用／不使用を左右する」という。文脈を含めて考察する場合には、前の文脈に影響されて、能動・受動の選択がおおずと決まってくると思われる。この点を避けないと、否定における能動・受動の選択の可能性の本質や、「否定」という要素がどのような条件において、能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいかについて検討できなくなる恐れがある。ただし、工藤(1996:84)、王(2003:32)でも指摘されているように、否定は文脈に依存する性格を持つという。また、実際に、用例の自然さの判断には、その表現が自然に用いられる文脈がどの程度想定できるかという点も大きく関わるため、完全に文脈を考慮しないわけにもいかない。よって、本稿で用いた母語話者へのアンケート調査⁽⁸⁾においては、劉(2023a:185)を参考に、その前書きに、用例が用いられる文脈が想定しやすければ容認度が高くなり、使用の文脈がなかなか想定できない場合には容認度が低いと思われる、という記述も加えておいた。

(8) アンケート調査での用例の容認度のスケール設定や調査の結果の処理方法については、本稿では、劉(2022:65)を参考にした。劉(2022:65)では、容認度のスケールを「0点(不自然)～3点(自然)」のように設けており、そのうちの「1点」と「2点」はそれぞれ「どちらかと言えば不自然」「どちらかと言えば自然」である。また、例文冒頭の記号の付し方の基準に関しては、劉(2022:65)では、島田ほか(2017:10)を参考に、基本的に平均値を基準に付しているが、用例の容認度のばらつきが大きい場合、つまり、「自然／どちらかと言えば自然」と判断する人数が半数以上占めているにもかかわらず、平均値が不自然なレベルになっている場合には、中央値をもとにする。さらに、例文冒頭の記号の付し方については、大江(2019:55)を参考に、「0以上1未満:「??」、1以上2未満:「?」、2以上3以下:記号なし」のようにしている。なお、アンケート調査は10名の母語話者に協力を仰いだ。調査の回答はLINEのオープンチャットにあるアンケート募集グループで収集した。調査協力者は全員大学生と思われ、具体的な情報は以下になる。①男性:4名、女性:6名 ②年齢:全員20代、③出身地:関東(東京、埼玉、神奈川):4人、中部(愛知、石川、岐阜):3人、その他(山形／大阪／宮崎):3人。

4. 考察

この節では、動詞の否定の形ごとに、能動・受動の選択の可能性と意味的一致性について考察していく。

4.1「シナイ形」の場合

動詞が「シナイ形」の場合、能動・受動は両方選択可能の場合もあれば、片方選択可能の場合もある⁽⁹⁾。(20)～(29)は、能動・受動が共に自然であるため、両者は両方選択可能となる。また、能動・受動の否定形の意味に関しては、能動は「主体が何らかの行為を実行しない」という意味を表し、受動は「被動者が何らかの動作をされることは起こらない」という意味を表し、両者共に「未生起」として位置づけられると思われる。

- (20) a. 太郎は⁽¹⁰⁾次郎を騙さない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に騙されない。【A】⁽¹¹⁾〈未生起〉
 (21) a. 太郎は次郎を縛らない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に縛られない。【A】〈未生起〉
 (22) a. 太郎は次郎を倒さない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に倒されない。【A】〈未生起〉
 (23) a. 太郎は次郎を蹴らない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に蹴られない。【B】〈未生起〉
 (24) a. 太郎は次郎を刺さない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に刺されない。【B】〈未生起〉
 (25) a. 太郎は次郎を雇わない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に雇われない。【A】〈未生起〉
 (26) a. 太郎は次郎を救わない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に救われない。【B】〈未生起〉
 (27) a. 太郎は次郎を愛さない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に愛されない。【B】〈未生起〉
 (28) a. 太郎は次郎を褒めない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に褒められない。【B】〈未生起〉
 (29) a. 太郎は次郎を認めない。〈未生起〉 b. 次郎は太郎に認められない。【B】〈未生起〉

それに対して、(30)～(33)は、能動が自然であり、受動が不自然になるため、能動・受動は片方選択可能となる。なお、林(2009:101)では、「未生起」は「動作や変化が最初から全く生起しなかった」と定義されているが、ここでは、動詞が「シナイ形」であるため、「動作や変化が最初から全く生起しない／しなかった」というように修正する。

- (30) a. 太郎は次郎を育てない。 b. ?次郎は太郎に育てられない。⁽¹²⁾【A】
 (31) a. 太郎は次郎を逃がさない。 b. ?次郎は太郎に逃がされない。【A】

(9) ここで使用する用例に関しては、やや非日常的とも思われるかもしれないが、金水(2000a:13)では、文法性判断をする際に、「文法の例文は日常的な文ではないと非難する向きがあるが、日常的でないからこそ内在化された能力が際立つ、という面がある」と述べられている。それも一理あると考えるため、本稿は金水(2000a)の立場に従う。

(10) 動詞の「シナイ形」の場合は、「が」で主語を表示するより、「は」の方がより座りがよいと考えられるため、本稿では、これ以降は、「シナイ形」の場合とそれに対応する肯定の「スル形」の場合のみ、主語を「は」で表示する。

(11) 本稿では、【 】で動詞の類型を示す。

(12) 本稿では、能動・受動が「片方選択可能」となる以上、意味的に一致するか否かは問わないこととする。

- (32) a. 太郎は次郎に花子を預けない。 b.?次郎は太郎から花子を預けられない。【A】
 (33) a. 太郎は次郎に謝らない。 b.?次郎は太郎に謝られない。【B】

上のように、能動・受動の選択状況に違いが生じるのは、受動動詞の否定形の意味による性質解釈の可能性に関わっていると思われる。最も典型的なのは、動詞の表す動作が被動者に不利益を与える意味を持つ場合である。(20)の「騙す」の場合は、否定文の主語が不利益を回避するための何らかの性質を持っているということが読み取りやすいため、成立しやすい。「騙されない」とすることで、「次郎が慎重だ」といった良い性質が読み取れるからである。逆に、動詞の表す動作が被動者に利益を与える場合でも、(25)の「雇う」のように、主語が何らかの悪い性質を持っていることが読み取られ、用例が自然になる。「雇われない」の場合は、「次郎が怠惰な人だ」等といった良くない性質が考えられるのである。それに対し、(30)～(33)の「育てられない」「逃がされない」「預けられない」「謝られない」の場合は、動詞が被動者に利益／不利益を与えるか否かにかかわらず、主語の何らかの性質が想起しにくいため、受動が不自然になる。

また、上の(20)～(22)を(34)～(36)の肯定と比較して分かるように、この場合には、否定でも肯定でも、能動・受動が両方選択可能であり、否定の能動・受動の意味的一致性の面でも同様であるため、「否定」による影響は認められない。それに対し、上の(30)～(32)の場合は、(37)～(39)の肯定と比較して分かるように、肯定と否定における能動・受動の選択状況が異なるため、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼすことになると言える。

- (34) a. 太郎は次郎を騙す。 b.次郎は太郎に騙される。【A】
 (35) a. 太郎は次郎を縛る。 b.次郎は太郎に縛られる。【A】
 (36) a. 太郎は次郎を倒す。 b.次郎は太郎に倒される。【A】
 (37) a. 太郎は次郎を育てる。 b.次郎は太郎に育てられる。【A】
 (38) a. 太郎は次郎を逃がす。 b.次郎は太郎に逃がされる。【A】
 (39) a. 太郎は次郎に花子を預ける。 b.次郎は太郎から花子を預けられる。【A】

4.2「シナカタ形」の場合

動詞が「ナカタ形」の場合、能動・受動の否定形の意味が一致するか否かについては、林(2005, 2009)の記述は部分的に成功しているが、第2節で触れたように、林(2005, 2009)の論で説明できない例も存在するため、本稿では次のように整理しなおす。

まず、「終了限界の有無」という基準により、二つのパターンに分ける。動作に「終了限界」がない場合、すなわち、動詞が客体の変化を捉えていないB類である場合には、「動作主と対象の接触の有無」という基準により、さらに二分することができる。(40)～(43)のように、動作が発生する際に、動作主と対象が接触する必要がある場合には、動作主が対象に接触して働きかけるまで、対象がその動作を避けるとすれば、事態は「未成立」になりうると思

われる。このような「未成立」は、接触を回避して「未成立」の意味が生じるため、本稿ではそれを「未成立(接触の回避)」と呼ぶ。

- (40) a. 太郎が次郎を殴らなかった。〈未生起〉
b. #次郎が太郎に殴られなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
- (41) a. 太郎が次郎を刺さなかった。〈未生起〉
b. #次郎が太郎に刺されなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
- (42) a. 太郎が次郎を叩かなかった。〈未生起〉
b. #次郎が太郎に叩かれなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
- (43) a. 太郎が次郎を蹴らなかった。〈未生起〉
b. #次郎が太郎に蹴られなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉

それに対し、(44)～(47)のように、動作が発生する際に、動作主と対象が接触する必要がない場合には、「～(ら)れなかった」は「未生起」の意味だけを表す。例えば、(45)のように、「太郎」が「次郎を責める」という動作を行ったとする場合、「次郎は何かをすることでそれを避けた」ということは通常あり得ないからである。

- (44) a. 太郎が次郎に仕事を頼まなかった。〈未生起〉
b. 次郎が太郎に仕事を頼まれなかった。【B】〈未生起〉
- (45) a. 太郎が次郎を責めなかった。〈未生起〉
b. 次郎が太郎に責められなかった。【B】〈未生起〉
- (46) a. 太郎が次郎を招かなかった。〈未生起〉
b. 次郎が太郎に招かれなかった。【B】〈未生起〉
- (47) a. 太郎が次郎を憎まなかった。〈未生起〉
b. 次郎が太郎に憎まれなかった。【B】〈未生起〉

また、動詞に「終了限界」がある場合、つまり、客体を変化させるA類の場合は、「非可逆的变化を表すか否か」、「動詞が瞬間動詞であるか否か」という二つの基準によって状況が異なってくる。(48)(49)のように、客体の非可逆的变化を表す動詞の場合は、受動態の否定形の意味が「未生起」しか表さず、能動・受動は「意味的一致」となる。それは客体の変化が非可逆的であるため、動作が開始限界を越えていれば、仮に途中でであっても、動作が成立していると見なされるからである。

- (48) a. 太郎が次郎を殺さなかった。〈未生起〉
b. 次郎が太郎に殺されなかった。【A】〈未生起〉
- (49) a. 太郎が花子を育てなかった。〈未生起〉

b. 花子が太郎に育てられなかった。【A】〈未生起〉

さらに、動詞が可逆的变化を表す場合は、動詞が瞬間動詞であるか否かによって、状況が異なってくる。(50)のように、動詞が瞬間動詞である場合は、受動態の否定形の意味が「未生起」しか表さず、能動・受動は「意味的一致」となるが、(51)(52)のように、動詞が継続動詞である場合は、受動態の否定形の意味が「未生起」だけでなく「未成立」も表すようになり、能動・受動は「意味的不一致」となる。(51)(52)のように、動詞に終了限界がある場合には、「未成立」の意味は、対象が動作主の働きかけを阻止したりすることによって、終了限界にたどり着くまでの変化の発生を回避することで生じるのである。そのため、本稿では、これを上の「未成立(接触の回避)」とは区別して、「未成立(変化の回避)」と呼ぶ。なお、瞬間動詞と継続動詞の違いについては、日本語記述文法研究会(2007:84)によれば、両者は物理的にその動きが継続的に成立するか瞬間において成立するかという区別ではなく、動きを時間の幅のあるものとして捉えるか否かの違いだとされている。

(50) a. 太郎が次郎に資料を渡さなかった。〈未生起〉b. 次郎が太郎から資料を渡されなかった。【A】〈未生起〉(51) a. 警察隊が犯人を囲まなかった。〈未生起〉b. # 犯人が警察隊に囲まれなかった。【A】〈未生起・未成立(変化の回避)〉(52) a. 太郎が次郎の首を絞めなかった。〈未生起〉b. # 次郎が太郎に首を絞められなかった。【A】〈未生起・未成立(変化の回避)〉

以上のように、動詞の表す運動様態によって、受動動詞の否定形の意味が決まってくることを図式化すれば、以下の図1と図2のようになる⁽¹³⁾。さらに、林(2005:108, 2009:101)では、「未成立」が「動作や変化が実際に生起したが、事象の達成に到達しなかったため、途中で終わってしまい、結果的に完遂されなかった」と定義されているが、本稿では「未成立」は「動作や変化が実際に生起した、あるいは動作主が対象に働きかけようとしたが、動作主と対象との接触が回避されたり、事象の達成に到達しなかったりするため、結果的に完遂されなかった」のように修正する。

(13) 図1と図2にある点線の枠は「基準」を意味する。

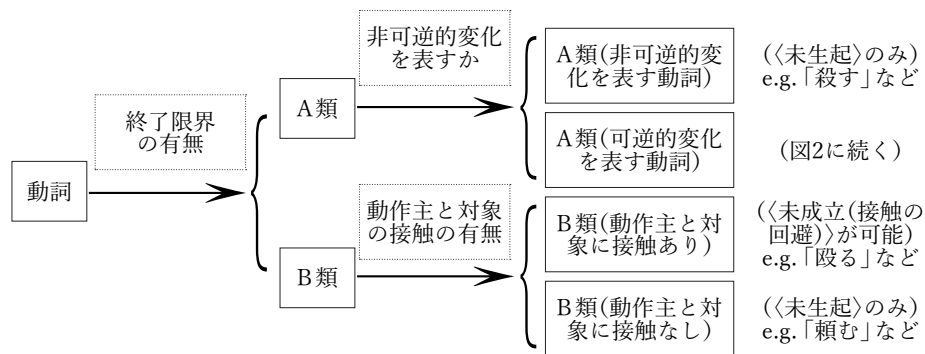


図1 「シナカタ形」における受動動詞の否定形の意味の決まり方(その1)

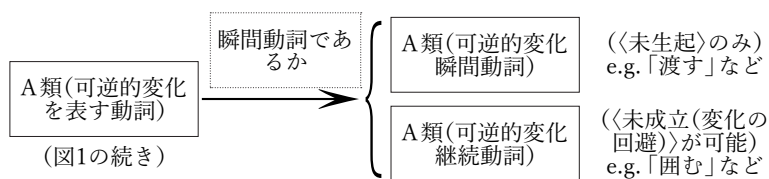


図2 「シナカタ形」における受動動詞の否定形の意味の決まり方(その2)

加えて、この場合において、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいのかについては、(53)(54)のように、動詞が肯定である場合には、能動・受動は「意味的一致」であるのに対し、動詞がB類、かつ動作主と対象に接触がある場合や、動詞が可逆的变化を表すA類の継続動詞である場合には、否定形の能動・受動は「意味的不一致」になる。以下の二つのペアを比較することで、能動・受動の意味的一致性に違いが見られるため、動詞が「シナカタ形」であり、動詞が動作主と対象に接触があるB類の場合や、動詞が可逆的变化を表すA類の継続動詞である場合には、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしていると言える。

- (53) a. 太郎が次郎を蹴った。〈成立〉
 b. 次郎が太郎に蹴られた。〈成立〉
 c. 太郎が次郎を蹴らなかった。〈未生起〉
 d. #次郎が太郎に蹴られなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
- (54) a. 太郎が次郎を騙した。〈成立〉
 b. 次郎が太郎に騙された。〈成立〉
 c. 太郎が次郎を騙さなかった。〈未生起〉
 d. #次郎が太郎に騙されなかった。【A】〈未生起・未成立(変化の回避)〉

4.3 考察のまとめ

以上の考察をまとめると、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性は表のようになる。能動・受動が「片方選択可能」になる場合と「両方選択可能(意味的不一致)」になる場合には、

「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいと言える。

表 能動・受動の選択の可能性／意味的一致性⁽¹⁴⁾

否定の形	条件	選択の可能性／ 意味的一致性	動詞例
シナイ形	受動動詞の否定形の意味により 主語の性質が想起しやすい場合	両方選択可能 (意味的一致)	「騙す」「倒す」等
	<u>受動動詞の否定形の意味により</u> <u>主語の性質が想起しにくい場合</u>	<u>片方選択可能</u>	「育てる」等
シナカタ形	A類(非可逆的变化動詞)／ A類(可逆的变化・瞬間動詞)／ B類(動作主と対象に接触なし)	両方選択可能 (意味的一致)	「殺す」／ 「渡す」／ 「褒める」等
	<u>A類(可逆的变化・継続動詞)／</u> <u>B類(動作主と対象に接触あり)</u>	<u>両方選択可能</u> <u>(意味的不一致)</u>	「囲む」／ 「殴る」等

5. 「シナイ形」と「シナカタ形」の異同及びその原因

この節では、動詞が「シナイ形」と「シナカタ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の異同とその原因について考察する。

まず、上の表に示したように、二つの場合の、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性は、類似点というより、主に相違点が目立つと言える。言うまでもないが、両者の類似点を強いて言えば、動詞がいずれの否定の形であっても、能動・受動が「両方選択可能(意味的一致)」になる場合があるという点が挙げられる。それは、二つの場合における能動・受動の選択の可能性／意味的一致性に関わる要素の条件を整えれば、能動・受動が共に自然になり、両方選択可能になるということである。

また、両者の相違点としては、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の条件は、動詞が「シナイ形」である場合には受動動詞の否定形の意味による性質解釈の可能性に関わり、動詞が「シナカタ形」である場合には、動詞の表す運動様態の違いに関わるという点が挙げられる。それは、動詞が「シナイ形」である場合は、テンスから解放された恒常的事態を描くことに重点が置かれ、受動の否定形の意味によって主語の何らかの性質が想定しやすいか否かという点に関係しているため、受動動詞の否定形の意味が重要になってくる。一方、動詞が「シナカタ形」である場合、能動でも受動でも過去に行われなかった事態に対する描写であるため、否定形の意味が主語の性質に関わることはない。むしろ、動詞の表す運動様態として、具体的にどのような動作を表しているのかが重要となり、「～(ら)れなかった」の形で「未成立(接触の回避／変化の回避)」の意味が想定できるか否かという点がクロージングアップされるのである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、動詞が「シナイ形」「シナカタ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性／

(14) 本稿では、「否定」が影響を及ぼしやすい条件に二重線を引く。

意味的一致性、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を明らかにした上で、二つの場合の異同及びその原因を解明した。その結果、選択の可能性／意味的一致性の状況は上でまとめた表のようになる。また、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件については、能動・受動が「片方選択可能」になる場合と「両方選択可能(意味的不一致)」になる場合には、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいと言える。

能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の条件は、動詞が「シナイ形」である場合には、受動動詞の否定形の意味による性質解釈の可能性に、動詞が「シナカタ形」である場合には、動詞の表す運動様態の違いに関わる。それは、動詞が「シナイ形」である場合には、受動動詞の否定形の意味によって主語の何らかの性質が想定しやすいか否かという点に関わっていることと、動詞が「シナカタ形」である場合には、受動動詞の否定形に「未成立(接触の回避／変化の回避)」という意味が想定できるか否かが関係していることによるものである。

本稿は、これまで注目されてこなかった「否定」と能動・受動の選択との関係に着目して、以上の諸課題の解明に取り組み、能動・受動の選択についての研究に一定の貢献ができたのではないかと考える。なお、本稿は述定のみに着目しているが、装定の場合には、必ずしも述定と同様とは言えない複雑な側面があると思われる。また、本稿では、「シテイナイ形／シテイナカタ形」を基本的に「シナカタ形」と同様と位置づけているが、これらの形の場合には、動詞によって、その否定形の意味についての判断が母語話者の中でも分かれることがあるため、さらなる考察が必要である。それらすべてを今後の課題とし、別稿に譲ることとする。

劉志毅(りゅう しき、LIU Zhiyi)
早稲田大学大学院教育学研究科

参考文献

- 王学群(2003)『現代日本語における否定文の研究』日本僑報社
- 大江元貴(2019)「形容詞基本形反復文の談話的・統語的特徴」『日本語の研究』15-2、pp.52-68
- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」『ことばの科学1』むぎ書房、pp.181-212
- 奥津敬一郎(1983)「何故受身か？—〈視点〉からのケース・スタディー」『国語学』132、pp.65-80
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 川村大(2003)「受身文の学説史から—「被影響」の有無をめぐる議論について—」『言語』32(4)、pp.42-49
- 川村大(2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版
- 金水敏(2000a)「文法性判断とステレオグラム」『日本語学』19(5)、pp.8-13
- 金水敏(2000b)「時の表現」仁田義雄・益岡隆志編、金水敏・工藤真由美・沼田善子著『日本語

- の文法2 時・否定と取り立て』、岩波書店
- 工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」、言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房、pp.47-102
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美(1996)「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会編『ことばの科学7』、pp.81-136
- 工藤真由美(2000)「否定」、金水敏・工藤真由美・沼田善子著『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店、pp.93-150
- 小泉保・舩城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 古賀悠太郎(2013)「受動文の使用／不使用と日本語話者の視点」『神戸市外国語大学研究科論集』16、pp.1-20
- 江田すみれ(2013)『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法—』くろしお出版
- 島田めぐみ・野口裕之(2017)『日本語教育のためのはじめての統計分析』ひつじ書房
- 高橋太郎(1994)『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房
- 張威(1998)『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3 第5部アスペクト 第6部テンス 第7部肯否』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版
- 畠山真一(2008)「動詞の限界性を判定するテストセット」『尚絅学園研究紀要』(2)、pp.27-39
- 光信仁美(1998)「現代日本語の受動文について—典型・非典型と文中における機能との関係について—」立正大学博士論文
- 村木新次郎(1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 劉志毅(2022)「能動態・受動態の交替と連体修飾節構造の類型」『早稲田日本語研究』31、pp.61-72
- 劉志毅(2023a)「能動態・受動態の選択とテンスとの関わり」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』第30号-2、pp.177-187
- 劉志毅(2023b)「日本語における能動態・受動態の選択と意味的一致性—アスペクトによる影響を中心に—」『日中言語対照研究』第25号、pp.46-60

林青樺(2005)「事象達成の観点から見たヴォイスの対立をめぐって―受身文の否定の意味解釈を通して―」『日本語文法』5-1、pp.104-120(林2009 pp.97-113再録)

林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相―事象のあり方との関わりから―』くろしお出版

ルチラ パリハワダナ(1997)「日本語の否定文のテンス・アスペクト」東京外国語大学博士論文

付記

本稿は、2021年度早稲田大学国語教育学会秋季例会(第15回学生会員研究発表会)での口頭発表の一部をもとに加筆修正したものです。発表の際などにご意見をいただいた皆様、査読者の先生方、早稲田大学の松木正恵教授・久野正和教授、慶応義塾湘南藤沢中等部・高等部教諭の佐藤優大さん、アンケート調査に協力していただいた皆様に、心より感謝を申し上げます。